



共古日録
 孫雲博製
 日十一

Handwritten text in cursive (sōsho) style, including characters like 共古日録 and 孫雲博製, scattered across the cover.



45
1413
43



門 15
號 1413
卷 43

早稲田 大塚 25.10.24
麻 兼

京都府の
山名
京都府の
山名

共 古 日 録 四 十 一

山ありふれに若念山とよと北若念村 東若念
真性院跡 西七訓郡坂本村の上方 北若念村 南若念
は河内國 ありとの 河内國 ありとの 河内國 ありとの
わくをいし ありとの 河内國 ありとの 河内國 ありとの
あるの元 京の 然るに 河内國 ありとの 河内國 ありとの
耳中 故事 要言 に 正月 二十日 女は鏡に 備へ 餅を鏡
臺の 祝とよふ 若念は 初瀬 祝とよふ 詞の 縁をとりし
何故に 七五三の 数を 祝に 用ゆかを 云ふ 一三五七九

何故七五三を
祝意数とす

初瀬祝



昔八十年と
祝数

陽数一 二四六七八九
七五三二一
...
三月十日の酉を始るの辰酉といひ四月廿六の酉を
辰が辰酉といふ

深雨四月日

古墳より
多数の鏡
出たこと
事

諸國周遊三の鏡に...
...
二月廿六の酉を始るの辰酉といひ三月廿六の酉を
辰が辰酉といふ

梅丸の
墓石の
こと

外 證法堂書子
三月廿五日

長
鳥
の
約

鴛

若有聞法者無二不成佛竊惟

支原光理志丹根魚專行外道法而扁欲奪國之志無二也於明三亦禁斯徒不異便朝昔年
東照神君則建嚴重也雖也彼從量好五而由性在子内不貴佛言亦重王法也感也
政事約全九州諸將斯時彼國統岑不致七滅了即奉三權聚其數方頤為其分是時高來當
那三兩埋却之兵自是托東國中歌太平當其日劍光風矣祝祝禱禱

聖
字

疵の
神

喜に

常山前基

為七壽丸
生年十九九年建三

と記ある必研をり 亦研脱ふしあもや否やももるす尋

年々諸事 聖の字至に從ては三く古成に

はすいせぢやてい 疵を抄と社の子のり

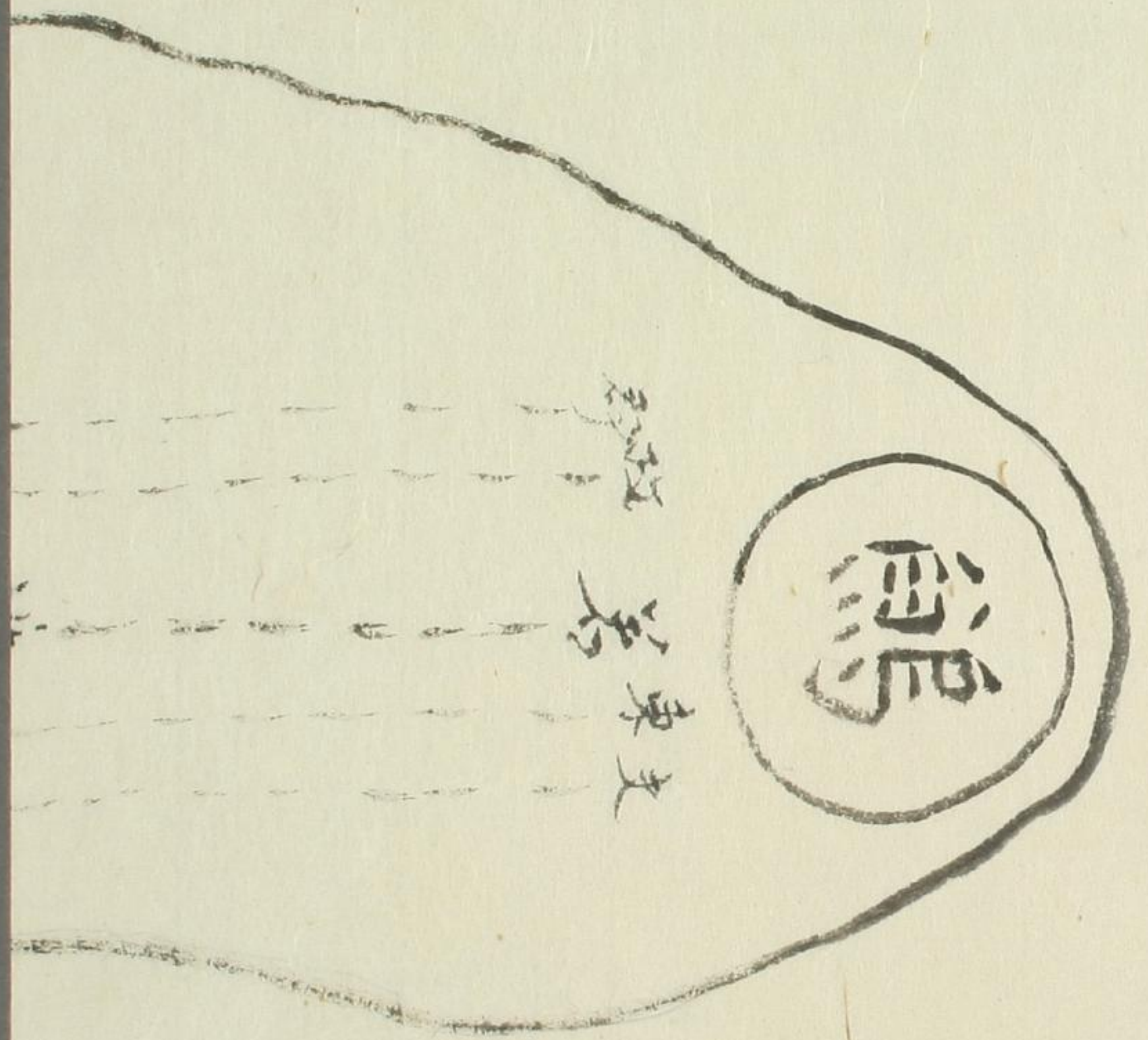
越後の予谷の内農某の處なる社あり名大明神といふ昔より祀る
をなると神に祈りいるをてて 疵を抄と社の縁下の掃子の内へ
投するをくに日あすしていほのぬり妙なり投するのるかなる
形とてとにこかとの田めたる如く田をとなるも又奇妙なりと
下谷北本所の内野照中社の縁の下より豆を投つて祈願す
と同様の土俗あるは何か縁下に神靈か神使があるとは信せ男

るを寺にありては
夢の巻にして杖の
しよ

堪思世夏南蘭溪堤日城肥之後州天軍郡有益田四節者官者立鬼理志丹
 宗上可以外道法示國中國外是男女而為堂矣當實承十四自丁丑中冬其堂
 破却佛祠神社境佛村落及家惟渡肥前高未郡指龍原城其勢三万七千餘
 人忽欲覆國家縣是列國諸將馳高彼戰場討在嗣日海陸合戰無休時終至
 明年暮春打破敵郭討捕彼凶徒數千乃也強董不全悉滅七畢即放當郡當
 村亦聚三千三百三三頭埋却一墳矣然而星霜歷十餘歲至于今時郡賊不明
 能野羅現第一臣能美火臣重高數代嫡孫餘木重成公篤敬三寶全廉仁義
 加之世世通文漢公見彼塚塔照數千之魂靈悲極汎海若思建碑在塚上
 以伸供養伏願憑斯善根諸靈速生佛之證無正等賞心乃至平等利益
 若也因行野局之事然未句云尔
 佛性賢愚平等法
 向妻有生死而業
 本來無物空亦空
 流水澆溪山岩業

高正保四自丁亥七月廿日

新心中華史記之



靈
 東
 文

弘前
鳥白

青森県弘前市西沢森町曹洞宗長勝寺所立

禱

鳥心貞玄無居士 菩提也

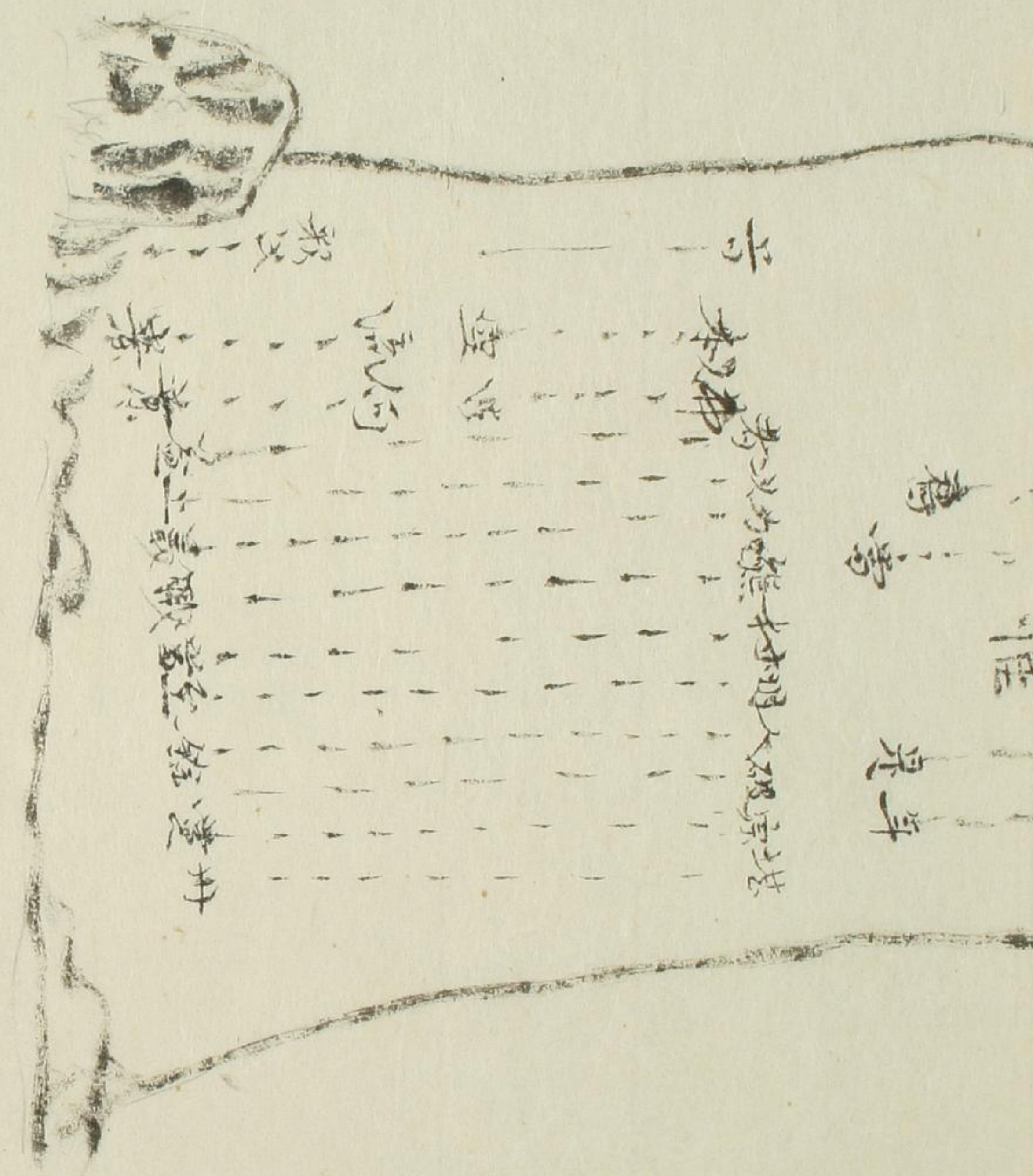
萬治元戊戌年十二月十七日
信隆公所供 山田大左衛門尉隆政

長香院殿鐵心祖関大居士 菩提也

萬治元戊戌年十二月十七日
津輕百助藤信隆公

鳥梅巖道紅禪定門 菩提也

時萬治元戊戌年十二月十七日
信隆公所供 高屋又三郎政次致自



右京大夫津輕為信

越中守信牧

土佐守信義

十郎左卫門信英

支藩黒石藩祖

百助信隆

越中守信政

右京大夫津輕為信の御下
越中守信牧の御下
土佐守信義の御下
百助信隆の御下

古法
種類

人数は可成のなりともいぬるものなり
示す所のみよき事と決す。この中には一般のものと
其種類が多し馬込の松坂牛骨の発見は知られたる
の上はたゞを知らせられたる如漢古令の上をあれ
○鹿ト

○鹿ト 古事記に鹿甲の占いは春日南宮の西角に東座す
社をバフトトノトノ明神と申し神社を占む事なす
○鳥ト 鳥物も古語に歳初に山中に諺して鳥の腹を割
みるに古語者は歳豊なり。否と申すは有災名鳥トと
西域行也

○鳥ト 参考迄平成記載
伊呂波表
伊呂波表の臨時の伊呂波表
伊呂波表の臨時の伊呂波表
伊呂波表の臨時の伊呂波表

田新より前をあらわす家なることとす。この穀を合せ
けつに赤熟白熟を見て一畝と番す。進げにけり。

鴉ト

田環ト 常山紀談始末 野向左馬三遊ゆのい田環を好

一この斤環は三ツ上とある方二分とあるもの。其合穀勝負
のまじり方を造いこみ勝つ方のいなりなることなり。

米ト

横中納言俊忠御下意 ぶねがらのそのく米ぬ
こ思ふことみつてふ数をとのむことなり。

二粒と三粒とを分ち賜ふりてそのまみまからい置て米
慮を向いて三粒あるを給ふことなり。

三の國ハタカ右美州ハニ女成ら月十廿粥

占の疎る神前粥を煮て年中のい種種三種の書出を
よぶ。四五寸の管十七本を設けて火を好め、茶を
こぼし、七種のいれを定めてその数を管に記し別
也。管とて徒に管一本をか合せて十八本を束ぬて管中
み入れさて米をのり粥を煮、調てのち管をぬり上げて
その管中を見むに粥の充満なるを火を止す。すべし
字にさし出さず。ゆりたるを中書して粥の汁をらぬ
いもあり。越後ハ丹生味紅を煮る。すべし。端の粥を紅
さしあり。

帯十 油中抄 常陸のいも男女の中いれを占む。帯
といふもの帯。すべし。いれを占む。いれを占む。いれを占む。
りせぬ。粥味のいれを祝詞を中帯を好む。いれを占む。

きんかして未せぬ道は然らずをわらわらぬ人かちあはらひ
らむもあはれぬ結末もあはれぬおけ帯の娘はまらに結ひしな
かゝるも

琴下 渡辺お珠子 雲帳三日月の中をひらき居る乃言時等
二行にお取入る未琴弦は大事事持守請祭云々

鏡下 唐詩 屏風織女 又夜石井有若平柳鏡
指下 大鏡 指占 寄物恋こひすてあふけの味

よきさしめれ指占ととも里こゝろして
冬もあきも憂ふ意に 二位あはれ心苦くもなと然ひて一修城川
度指占も指占も指占も東の丸車とてさせ然ひて指占
をいひぬれし十上五許の先なる量部の十二人西より東
向ひて走りけるが子をわらわ同音に揃は河摺るを指占重の

塩波の波の寄物と云ふ過こたひて指占をゆき東を指して
能が如して矢もけり

度下 正治二年百首 御侍下すさむいふ向ふ度占の物さまで
埋めて道ぬちといはるる

按察使大納言長三郎集二 寄占 樂「あといひひすさむ
にまます」度占もあはれとてふこといふ

松明下 数聚又物考 一は憎む折の祝物に能成長範夜
討の砂よとて松明のト下みかにかにさくかの松明の照み
たし二の松明のゆつてあし三は取つて投送して少が三がみつな
がら満えて小こころを笑止なる大事よそれ松明の
うらむとて云ふ松明の松明は軍神二の松明の時運三
は我々が命なるが三つあがる満えるをうが今夜の夜うち

はさてよる

水ト 糸葉集ニ イモニアハヒサシクナリ又ニキミカハ
キヨキセゴトニ ミヤウラハヘテサ

名ト 埃意少 幸味乃祠ニ丸石を置くるの經
重々として事の吉凶を卜すを云ふ

凡ト 古方類書纂要 而京壽安縣有聖名山神
祠顯靈前有石而尾過客投之以上休咎作爲吉覆
爲凶

草ト 見前續筆 草叢賣人云ト也即鷄骨ト

之類隨意取草ト之能知吉凶云々

山菅ト 蕙草を占ふ部云山菅占山菅の葉を結ひ
合せて其の末をわらひざる結ますと云や

歌ト 梅園日記 婦人其心をもる首の草然をいらす
其歌をいらすと云ふ

夕ト 小治政三編五平三崎母生女王の長歌云 杖葉毛
不衛毛去而夕猶問云々

正ト 十字街を去て苦楊の楊を抱つて道裡涙を念し
て是れ来この人の語をいして吉凶を卜定むと云ふ 苦楊を告
の義を取らざる

是ト 日本書記通記 兼冬日尾占謂不安是於下處以
ト言者取不定之義也

色ト 大唐傳載 常衣之在福建也 有瘡其者善
占色言事若神云々
墨色をいらす云々

天文人妻と云ふ
 太平の賢者
 春秋感精の群臣
 怒別日黃無光羣臣率則日裂人主柳介別日及出
 收ト 道の所へ行りかゝる時杖を立てその
 到りて方行く
 人相及手の節
 神佛のくじの類
 婦女子の身以て
 算盤占
 此の供進いのる履八卦
 こと業子
 以上の事多くあるがこれら唐文庫及今の本に
 記しなくとも考の目とすべし

白部
 潜女

和名白部 辨色を以て云白部 和名今按る日本記云
 用魚人二字に云用海人二字
 潜女 本朝式云伊勢國等潜女和名加豆
 此等潜女は少の女に於てものなまが後ふあまを
 は女のぬれしつらみ乾もとのよあふたるはな
 ちつぎの女に於てなれちり大ちつぎつちつぎの女
 此の女はあまカツキメの女にのこりたるものなり
 三の女に神此の伊勢をの延の住居なり髪は髭のほ
 姿はまもあり由はかくくも大かつぎとてはくも
 せかかるごとく夏秋の男女より福を特異神はあ
 びん濱の砂を床し杖を執りて臥しゆる女由はくみ

摩多福喜書こ部
西米利加え傳道使ゴブリ談

横濱明治四年七月刻成

とあるれが書初めなる喜書枚るこ又支那に於て
日本銀行假名文にて熟練傳あり出るこなるもの
写本ありと云はる三十八年とありてハツテハ
新嘉坡里夏書院蔵として善徳堂と云ふあり
又同の大本も路加傳あり一枚の半漢文と半片假
名なり見よしに
乙卯年鑄

路加傳福喜書

往普天下傳福喜與萬友

安政二年に當り日本銀行の蔵のりなり

大正新語

大正新語ニッニセ

サイノゴジ 妻を連れたる人の妻のこゝろ
セシ妻いのらんとしとあり

銀プラ 妻を連れたる人の妻のこゝろ
とあり銀座の銀歩とあり

ペラゴロ これハドラスの道に轉語をカプラ
の語出てころころの出しなり

青島國隨筆 ありありと長江の舟の舟長

一也川ニセ X 子トニセ 三ハ久

○今セ 街の及手酒とて 戲ニ其名目を用ふるのみ

長江隨筆

皆然の事なるを以て人徳也 といふ唐三書の事

孝の事ありしはこれなり

ト部神道

永正八年三月朔二日ト部神保年午年七月七日高
の神主にてト部の祀の役せし物部保子到りて神道を佛
法に引合せ延徳元年三月廿七日保子相置し神楽岡
の舞場の下に里而も八咫麻呂終る形はをり諸人
を思物せしの中にも先づあり其の中守邊の八咫
黒雲の道に神楽岡に飛来し終るはしといふ能
八咫麻呂を連し延徳元年より百年はありト部神保
の代に八咫麻呂を神楽岡に神保子也 昔唐書海の如
は神道を志しし神道を志しし神保子也 昔唐書海の如
道を志しし神道を志しし神保子也 昔唐書海の如

神楽の如く中臣後三の護あり後をすべしや神の心
かたしとよむなるんといふもなり又高き神を枝うは
なるんといふもなりとをり下なる史記を大木木の
神方迄の如く八咫麻呂を神保子也 昔唐書海の如
延徳元年の崇神は高きなりといふもなり其の意和歌
の如く高きなりといふもなり其の意和歌の如く高
高きなりといふもなり其の意和歌の如く高きなり

琉球国月符

月符の事 琉球の事 中山傳信録 八月初三日
并月明夏之鏡後録 佑有月符之類 凡月初三十
八廿三三三皆修吉果并符と見也
九年十月廿日 佑有月符之類 凡月初三十
に教司谷邊 教司谷邊 佑有月符之類 凡月初三十

教司谷邊

紋の狂
歌と笑話

なつて見てもかたはれぬしに女中の世が所敷に二話に
見ると **第六文** 夏朝になつて何れか行つても赤い
かえりの中 意は... けりのはは ... 貼りつけ ... 此のがあつて ... 大久保の氷 ...

何人のお歌なるを ... 世の中 ... 安平九年 ... にもぬんか ...

朝鮮の
字謎

何月何日 ... 蛇の目は ... 可テあ ... 母笑 ... 見たり ... 同 ... 後 ... 字 ... 魚 ... 馬 ... 鳳 ...

親

木の立に立て見るとは 桃 一番は山あふ木は此は数多きもの

田

東西南北何れから見るとは 王様は

是

日の下に居る人は 鵜 左右の手にて持其子為養育す

尹

尾の長い動物は 雀 山の下の鳥なりは

宿

一人の為洋人冠をかぶつて居るは 白人煙の白をさす

問

左右何の方面から見るとは 問をさす

牆

土は二向くしちか

駕

頂羽 (一)は能辨のえつと (二)は武力のこゝろ

一番

長いもの 雨 (天より地迄一本の棒のあまものは雨をさす)

三

の歳は生れ十五成長し廿九か廿で死ぬもの 雨

あ

り如解民俗資料 一編 総習 序 一と大正七年七月に校訂

石段の石賃

是那古の
燈火器

折信文氏信
あつた
活

如解まは白のきるもの 如と書堂といひ其堂は

支那金名史の考久なる石段の石賃まはグラサイトの如

なるが皮の如きもの 如と書堂といひ其堂は

古く支那にては如の如きもの 如と書堂といひ其堂は

河南登城玉に左右に花をさす 如と書堂といひ其堂は

活の如きもの 如と書堂といひ其堂は

活の如きもの 如と書堂といひ其堂は

活の如きもの 如と書堂といひ其堂は

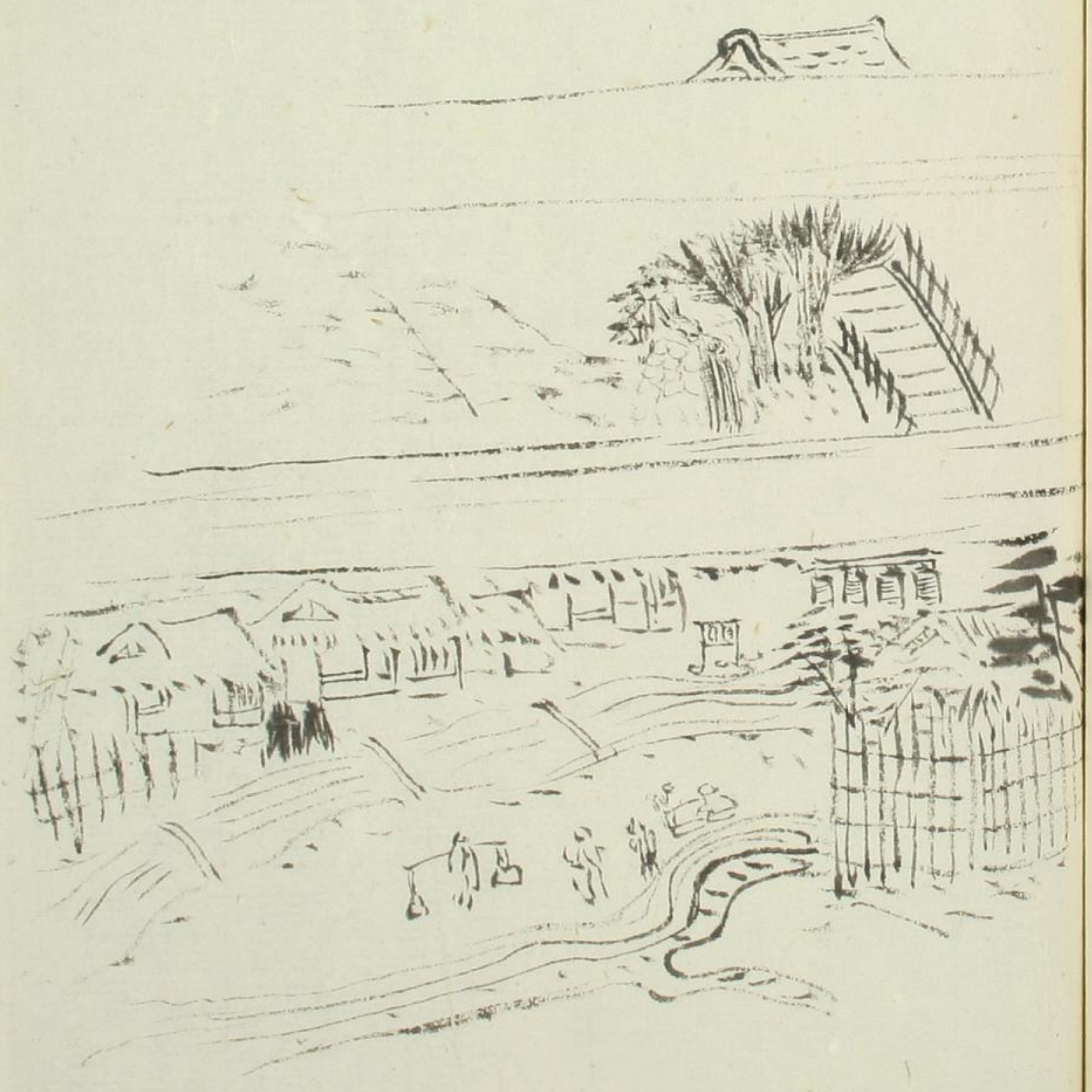
活の如きもの 如と書堂といひ其堂は

活の如きもの 如と書堂といひ其堂は

の枝を折りきりて其人の曲を
 下伊那野の村に於て大い
 なるかたけの神の社を
 二ノ村は古の神ありて
 下伊那野の村に於て大い
 なるかたけの神の社を
 二ノ村は古の神ありて
 下伊那野の村に於て大い
 なるかたけの神の社を
 二ノ村は古の神ありて

王子の神の御

文化の
 王の
 神の
 御の



新鑄古銘
の鐘

弘前長島寺に嘉元四年の古鐘ありこれを見らば鑄造形
式今時のものなり銘文を讀むと銘は迄代の女とありし
鐘ニ鐘の銘文は四の如くにして改鑄せしものと見ゆ
しるの軸軸を以てして一土佐の正隆寺の鐘と銘は古く形
式迄代のものにして改鑄せしものと見ゆ
數枝して今時のものありしと見ゆ
なまが板わき妻木信忠公の法門を記しし鐘なり
のなるまが板わき妻木信忠公の法門を記しし鐘なり
切を記しし鐘なり
しがえり今時の女と見ゆ
しるの軸軸を以てして一土佐の正隆寺の鐘と銘は古く形
式迄代のものにして改鑄せしものと見ゆ

古銘
の鐘

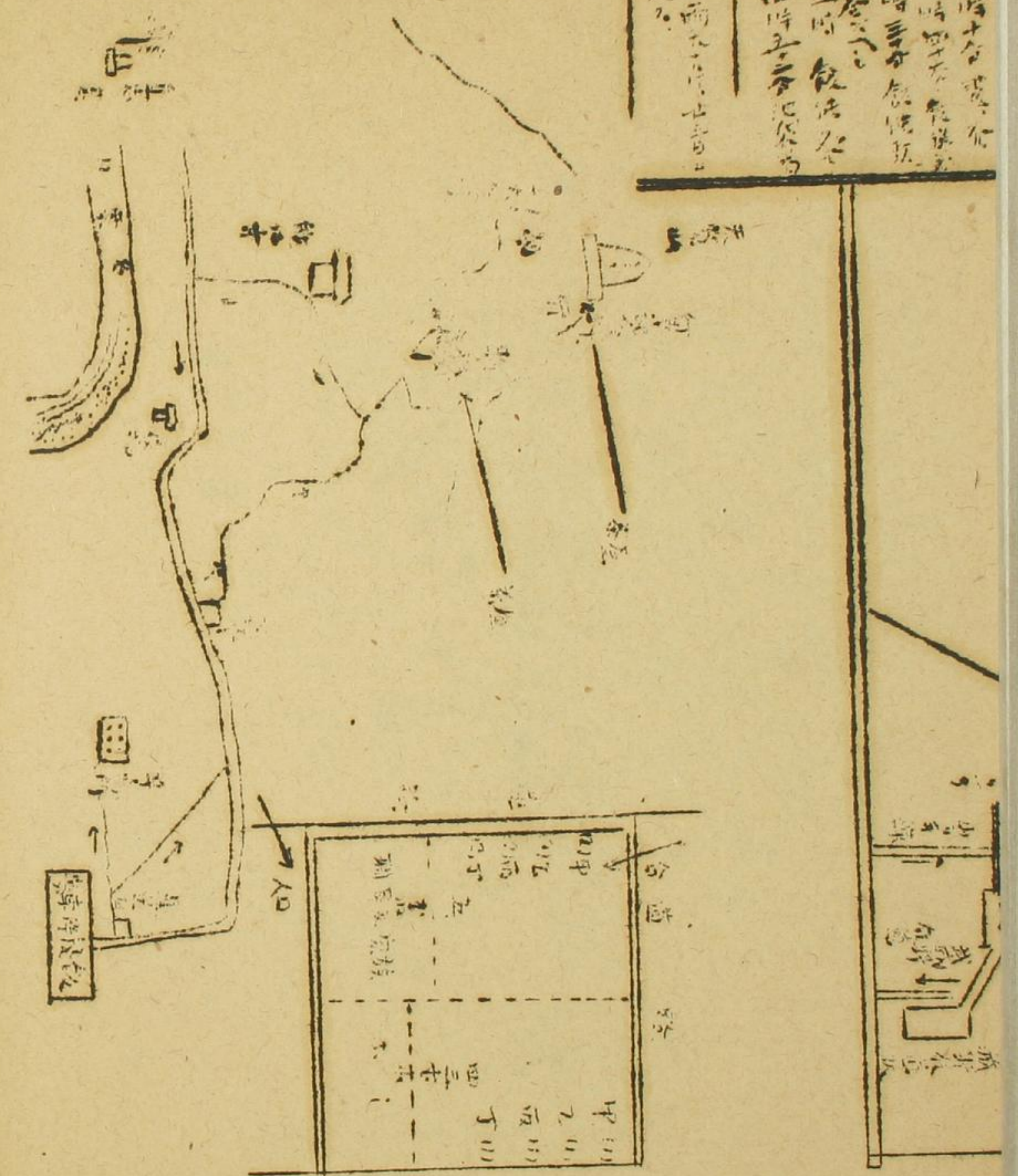
能記行

大の能記行
行するも同り年ありしと見ゆ
生誕して能記の記を以てして
しるの軸軸を以てして一土佐の正隆寺の鐘と銘は古く形
式迄代のものにして改鑄せしものと見ゆ
なまが板わき妻木信忠公の法門を記しし鐘なり
のなるまが板わき妻木信忠公の法門を記しし鐘なり
切を記しし鐘なり
しがえり今時の女と見ゆ
しるの軸軸を以てして一土佐の正隆寺の鐘と銘は古く形
式迄代のものにして改鑄せしものと見ゆ

深川公園
の三地蔵

角力取組
加三蔵の碑

一、...
 二、...
 三、...
 四、...



深川公園の取組は... 長七尺寸... の文字... 堅い石...

出雲... 長七尺寸... 龍...

天明七年... 角力... 姓名...

深川の二軒
茶分

雲が其也 子夜遊魂 建石象形 表紙萬年
旭谷天恩孔平信敬撰 赤崎劉長和書

深川の二軒茶屋は延享四年の櫻井社の境内にありたる
料理店のおりし **地誌調書**に云く山店二軒茶屋が右社
歌波井為取結物成言は九甲店初は田樂だん共書
初まより紅地のの酒場の場を散々あり
初ま甘味三右衛門文右衛門と申すは社園豆屋焼初
は故世言都社園あるに擬ら二軒茶屋と申すは故
は古川帳角力と申すは焼初故店敷り八九軒あり
獨り此邊中絶は當時は八幡茶屋二軒茶屋の外志行
内二軒ありし終に四軒ありたり
明和天明の頃より大前(牛の前)前(大志屋隣)前(地蔵社前)

明和天明頃
流行せし料理
店

猿江町の
庚申

初まの所
の鳥居と石
地蔵の年

芭蕉庵
の跡
の跡
の跡
の跡

武蔵野橋(同七変身庵) 甲子屋(真海) 田舎庵(水戸)
百川(伊勢の意) 号は大前りしたるなり
深川猿江町二八にある真申堂の右邊古し茶屋は後に
改めし所の字は十一年の字ありし
深川初ま本林に石鳥居は文政十二年乙酉二月初午と
あり又石地蔵は天明五年乙酉二月初午馬場町二丁目中
とあり
芭蕉庵址は今の東年北を深川西元所に當りしと云
深川の跡が長考より 開始せしは明和廿一
年七月下なり
以深川にありしは以水画敷深川の邊のなり
安ん妙なり

追分第の
原岷

つぎは是れ淮南の術なり其後二百の昔蝦も一生涯
つかふ是こよつて其の蝦と名付たり
此ののりゝる者蝦の蝦と書けりものなまゝいふ
大回の界のそらたは不
越後追分第の原岷とて此の蝦は
思路高の蝦もいふもなまゝいふがせめて歌集に
此名ははれぬ蝦もいふこの蝦の類も原岷とていふ
蝦も海路に方カモイとて連れていふたや真也と
方カモイの也義經の夢所ありと神の義經を戀ひて
とていふて死す故に名に女を名はれし海を
と必す難あり其蝦も道を行かぬも方カモイの海
海をいふも其類いふもぬとの神の如みによつての蝦

諸高人の習業

諸高人の習業

蜂草

イロハニホヘトチリヌ

二種

僧店

フルハキヲサメテ

壬子屋
牛肉店

千リ川月丁天カツ丸

千ハ十一月フ

乾物

アキナイタガラフ子

マハ十一月フ

材木高木
建具高木

本ロツソレタヨ山キ

本ハ十一月フ

せもの

分厘ノ斤両間丈尺寸

足袋 木綿 紙屋 植木屋 砂糖屋 薬屋 生糸 行高 料理店 小荷物

本千原夕吉火才赤平川
 イアマツサカチラシフネ
 イゴヨキ久位ホチ利夕正
 テキハテウヨヨ平ロジセイサンバドウキシ
 川子ニ三文
 コエテアサキユメニシ
 セカイニサヨロコブ
 ヤリフリフチタメシヅカニスラキアツタキワ
 ネゴカジレキヤクヨベ
 人平生丸カモノ方リ

白米高 青物 魚屋 諸藝 人力車 下駄物 葉茶屋 海草高

アキヤイノメデダサ
 チンブリダダガロシロジセイサンバシサウ
 丁イ△井メーナハ久
 ナヨシゴダダメロシセイサンバシキワニヨハヤッコ
 三五はゲタメナハヨロズ
 ヘイビキヤマサキカダササダマヤカタキワ
 フジバヤシダリゲゴロシセイサン
 大ハ△×又△△久
 ノハ山レ○母吉メ申
 ヤスグウレオロゴブ

ヨシハ波川の船主
 瀧脇舟屋
 一石

ナヨシは...

ヨシハ波川の船主
 瀧脇舟屋
 一石

リ横は二り 川の横は三 月横は四

高屋

シヨコリヨコカワヨコツキヨコ

トヤガリニラシガシテシ又キ

酒屋

ウロコツチヨテリヤウケエ

石屋

一銭二銭三銭廿五銭廿八銭

此は近年の土間文章の勢... 解のつかぬもの多し

禪宗の
名目と解

禪宗の名目... 何故を... 解ありえらる

安外隨筆 禪家の僧司

修造司 知客

堂司 掃塔奉行 塔頭坊主

澤頭 東司奉行 旦過僧

首座 一番座の類 山主

蔵書記 物書

蔵奉行 行者

行者の歌なり... 禪家の僧司... 行者の歌なり

副冬望冬
供頭
庫主
出納
山守
木主
火鉢
信堂
外僧堂
徒僧

懸物洗濯奉行
調菜頭
庫意坊主
カコシノ原奉行
米鐵七納
新奉行
寮僧坊主
飯米七納
座禪の時
松久

知事
都寺監
副守
維那
直歲
寺社承仕
都官都向
同朋
方丈
裁塔
高祖大帥

一切寺の助
所謂を知り
新領を賜
佛事勤
米奉行
鐘堂
必名
力者
衆僧の頭
宗の最初
三出家

行ク
飯米
流
初

アキナイスル
寺住
交衆
心也
アキナイスル
行ク
飯米
流
初

起單
請暇
死
俗氣
洗躍
同朋
讀經

起單ト云
請暇
死
俗氣
洗躍
同朋
讀經

當任ツ 當頭トウ和尚
 前任ツ 東堂
 經藏ツ 預ラ 藏主
 文ニ 章ヲ 掌ル ヲ 書記
 書記ハ 外記ノ 官ニ 當ル 凡ソ 大外記ハ 守官ト 天下ニ 立テ 章ヲ 司ト 大内記ハ 御書ヲ 所ニ 侍リ 帝王 文ニ 章ヲ 代リ 奉ル 如ク 書記
 龍蟠ニ 任シ 一寺 文ニ 章ヲ 掌リ 書記侍 者ハ 方丈ニ 居シ 長老ノ 文ニ 章ヲ 由ル 者也 其宗旨 佛ハ 宗共 云ク 教外
 別傳ノ 旨ヲ 云フ 常釋 院ノ 旨ヲ 佛ハ 宗共 云ク 教外
 字如 何者 坊ト 書リ 強ク 留主 不限 唯得 常ノ 後見也 察
 下ニ 世諦 ヲ 三サ バク 也
 大德寺妙ハ 寺以 僧任 席
 單察 首座 藏主 書記
 之レ 長老 とス

老新書

五山の僧位席
 東堂ハ 西堂ハ 單察 首座 藏主 書記
 勅許 之レ 長老ト 也
 理頭 禪筆 可哉 禪僧 之レ 位階
 其ハ 國内 之レ 禪僧 之レ 位階 其ハ 大禪 景及 然カ 其ハ 禪僧 之レ 位階
 其次ハ 西堂也 其ハ 次ハ 單察 首座 藏主 書記
 其ハ 侍者 黒衣 新戒 日弥 彌也 其ハ 禪僧 之レ 位階 其ハ 禪僧 之レ 位階
 長老ノ 位階 之レ 見也
 以上ハ 大略 禪僧 之レ 位階 之レ 見也 其ハ 禪僧 之レ 位階 之レ 見也
 大心 新書 之レ 見也 其ハ 禪僧 之レ 位階 之レ 見也
 耐然 之レ 見也 其ハ 禪僧 之レ 位階 之レ 見也

の片銀を、とて、
共古按す。其の
原書其前の日筆
武家の父の長屋下を
由なる日語と云
又長屋なるぬ家
向く高人の言
一入に云て取
一人に云て取

奥の
道祖
神の
捧
の

意の甚く、
ありな
延す
の
と
不
云
西
の
と
か
あ

代持の解

神事再興す男女祈願あるも... 祈願の事叶す... 信より... ひり... と... 夫... の... 二見真... 所...

大正... 月盛... 碑... 此の...

此の三月月の代持は... 三つ... の... 此の... 蜀山の南... 平向寺... 實永五年

南無阿彌陀佛
三月廿一日
雪前月盛居士

其背... 武州江戸京橋... 大橋叡大師御筆... 此名號法名雪前月盛居士萬人染墨筆

云々... 諸國中行事... 土井... 神に供し... 農家の... 物... 祝... 中祭の... 銭...

母... 異る... 行なはる... 也

續... 信濃國... 井...

... 繩草木の枝... 他... 銭... 他...

道成寺に就て

一... 道成寺... 紀伊國... 道成寺...

増写法華救院の事にして自とあはすえ言の救書に至つて始
母の名あり鞍馬寺の僧なりといふ母の三書その事ハ
皆験記によれり上法廣周筆の畫詞より僧の名を賢學
といふ護曲より立つて僧の名を云ふまじくあやう然
野へ詣づといふま女の父真名子の庄司といふ事是れ
靈歌せりといふ験記今昔物語に実婦といふ繪詞以下
まふ女といふり中略 幸姪すに中山傳信録に種彦
の事との事道成寺の能は似たり中城縣姑場村農家
陶姓の児松壽といふ者年十六の女を娶れて萬壽寺に
逃けしむ主僧普徳といふの火鐘の内に隠せし家々鐘内
よりしを普徳諸僧と鐘を鐘りて是を究す女免首といひ
一見を寺より説法を擧つといふ

世事る説法道成寺の護曲の女は清姫といふことと華
験記よりええて實方婦と護増の事してなることとさ
彩書の案ハ傳りてその事とまはすは安藤といふ高川
の繪詞ありいは道成寺の護詞よりいふ女は護増と
けしもの三書あり又賢學物語に實方婦といふ僧の事
して地は上法華一巻ありその道成寺の護曲は地は
時に安藤にまはるこの庄司の娘清姫が戀慕すといふは地は
してから許多くの脚色をいふ事とまはすは父の事
は異なる事とありては娘を養育すといふ事とまはすは
庄司といふ事とありては護曲の文にいまも庄司娘
と實方婦の事とありては護増の事とまはすは護増
といふ事とありては實方婦の事とありては護増の事と

よむ紀の川工のいもせの山まほし 催馬樂の成りたよまぬ
むすめとふ同に見えたり
諸國採藥記：紀伊國鐘巻村に白跡あり鐘巻寺とふ
天香山道成寺のこもまほし
京都二条寺町妙満寺の鐘は道成寺の鐘なり
阿清姫のねころもに鐘は蛇體表をたししと鐘なる
かき成りしとて鐘なるをなせなるか人の寺の鐘は其
のこの前のものともなはぬものなり
阿南子聲：妙紀妙日乃即天恩山道成寺と
中々天武天皇の御宇紀の道成寺刹の寺も怪異事
曾て四五及にも不見又紀州凡記に記すも然り
先年同國山より天降る宗の御書来ると云ふ
語りけり當國日高郡に如所た跡あり

兄弟姉妹の分ちありまぬのさへいひなるよまぬ同郡
のうせの山谷をてまほし村あり其村に一人の女あり其者毎年
甲子年とてなむまほし島のまほしの山に女ありとて
標の産しありとてまほしの山に女ありとてまほしの山に
のちの高山の山に其まほしの山に女ありとてまほしの山に
のまほしの山に其まほしの山に女ありとてまほしの山に
いと洗ひてとてまほしの山に女ありとてまほしの山に
ゆめを河のまほしの山に女ありとてまほしの山に
まほしの山に其まほしの山に女ありとてまほしの山に
のまほしの山に其まほしの山に女ありとてまほしの山に
道の寺を長明とせよ
むすめとふ同に見えたり
諸國採藥記：紀伊國鐘巻村に白跡あり鐘巻寺とふ
天香山道成寺のこもまほし
京都二条寺町妙満寺の鐘は道成寺の鐘なり
阿清姫のねころもに鐘は蛇體表をたししと鐘なる
かき成りしとて鐘なるをなせなるか人の寺の鐘は其
のこの前のものともなはぬものなり
阿南子聲：妙紀妙日乃即天恩山道成寺と
中々天武天皇の御宇紀の道成寺刹の寺も怪異事
曾て四五及にも不見又紀州凡記に記すも然り
先年同國山より天降る宗の御書来ると云ふ
語りけり當國日高郡に如所た跡あり

磯城道成寺 聖徳太子の御宇
聖徳太子の御宇

百年の娘道成寺 寛延二年 中村座
 一妻現在道成寺 寛延二年 中村座
 京鹿子娘道成寺 寶曆二年 中村座
 江戸鹿子男道成寺 寶曆二年 中村座
 夢遊花丸道成寺 中村座
 以上は江戸長崎に於ては道成寺の類は
 多し然るも其の中は京鹿子娘
 道成寺と江戸鹿子男道成寺の二
 種のみを以て中村座の専らなり
 山崎の文の二種判書其の他を以て
 此の類の類は燕石の然る所なり
 此の類の類は燕石の然る所なり
 此の類の類は燕石の然る所なり

筑波の
 餅の
 餅

大正九年十月廿三日
 さつぱり
 餅の事
 筑波の餅
 十九夜尊供養塔
 刻し



子安大明神の
 寛延二年
 中村座

信州
 飯田
 童謡

信州飯田の子供達の歌
 三里先の地
 大井戸
 童謡

百草松蓮寺
の爲に碑

事とせしむ藍は紺屋の紋所とすのと同しと物事ふらぬ
又二年向る草如蓮寺に到し人の心りて文を傳ふる者
ありてそのに以ての靈を國に於てに枚碑三枚の
同あり大同二年、仁和二年、大長三年十月日
如蓮寺のはたの山に物なる枚碑の爲あるを
えはすやうにせしむるに物なる枚碑の爲あるを
しむるに物なる枚碑の爲あるを

千原谷の幡
の松と石と
の爲に銘

千原谷の幡の松と石との爲に銘
三枚あり
此の松に如ししと
九月穀旦別業高雲山月形はと刻す又北畔にあり

能野神社
の爲に銘

能野神社の爲に銘
元治元年甲子九月
能野神社の爲に銘
元治元年甲子九月

桐谷氷川社
石鳥居の銘

桐谷氷川社石鳥居の銘
元治元年甲子九月
又石階の上の文
元治元年甲子九月

十二社
の爲に銘

十二社の爲に銘
江都之勝蹟於東南而西北則寂矣
其蓋以高燥之水也
河渠不通舟楫缺使遊跡從寡
屠肆從陋於屬寂

如茲境丘巖錯互原野平叙始而幽邃然而暢達
 且狹一火也以開生面東華堂有數與楸不疎者何以
 都人取便利與所飽而真愛景致者少也人以為恨予
 則謂是駭流弱土砂逼雅香燭趣醉轉破景安得
 彼襟運雅興焉支樓華疑芳而人過香積國嘉木
 如綠而身入清涼地嘉聲湧月則觀一乘雪光照
 丘則澤六塵乃駭客才過而可醉可吟堪處堪賞
 四時佳景東南有幾我恐或疎局恨矣今記其概
 表之勝狀悉實非予筆可悉也
 嘉永三年三月 負及道人撰
 丘山分地那 立置屬天工池蓄千秋雨松杉兩岸風
 靜軒居士 日本書堂憲齋 源大彭書

此の碑の東に中一丈あるところの火既あしあ道のみを埋めたる

言わく善光寺の年中行り中々わがわがの年中
 物ありそのものを善光寺道々沙園をこく如來の年
 男が中衆を物心但常思防堂明坊は政を治十三人
 年當る人づの年又は遊遊童子を物心列年十二月二の中
 の日ある年越り其夜年二泊夜より正月十日迄白麻の淨
 衣袴のかけもの別々なる其の夜に當り人は一年懸掛ま高
 福妻科武井の三社といふ善光寺の三社(日冬敏繩山戸徳山)
 月冬なり利三年のあり男(今年)の堂童子より後
 り物あり大根にて陽根密根の形を似りて二つの形に
 して贈るもあり大根を男女の徳具を似りて送るは
 善光寺より山女嘉永川流と云ふし
 善光寺の贈り物 善光寺の仁まの二名はえは

此の寺は... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

松井村の
徳川家綱公の
御時

松井村の徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

松井村の徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

松井村の徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

松井村の徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

松井村の徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

華園
徳川家綱公の
御時

華園の徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時... 寛文元年... 徳川家綱公の御時...

其後橋の西畔に其の傍を標示したる木札を
城ありし

景

當深橋は往古姿不見の橋と傳へ増との由説者も婚後の
祭は此の橋を通りせず也と通す。例とす。中速川
入込の將軍吉宗公の車入の成の節、橋の名前しからすを
み車に因み爾後深橋と稱し、
物に改まらざる人々の心は、姿不見の妻命は依然
たることと大なる悲の念の今日に猶如くの感念を持し
よ。此の心は、人々の悲の心に出に行末をあらわし
と新る夫先人々の心、場所を強ひて通せしむ。

説き、
所村のく、嫁の度毎に不徳を感ず、頗る甚し近生之を
慨する久しかりしに、富或、
来の迷信を掃き、
の誓同を、
午前、
會堂、
の場、
大正二年十月
玉催者、
と

と、
と、
と、

あつては、
は、
海

朝ま、
兆子提す、
九つ、
け、
十三、

ト

書、
た、
又

た、
い、
あ、
あ、
な

名歌とあるは、
又昔、夕ぐれよ出て見れば前田にせがらぬ人、
かたりやれやるやせ余入る其の中、
こゝろの聲殿、紅の跡巻をた録が聲殿、
エリもか、エリもかのこゝろあま、誰れもけんともあけ
る玉のみ、いでわかし申すぞ、誰れもけんともあけるま、
笠の上で蝉が鳴け、おいとま申すぞ、田の神、
昔、源平の争ひ、源氏に勝つて、平氏の遺言をいふ、
か、解し、源氏に勝つて、平氏に勝つて、源氏に勝つて、平氏に勝つて、

一話一言可載田唄

多岐の田唄

とまやちんびん 年貢 二斗の 不足 入るが かた

下野國

とまやちんびん 年貢 二斗の 不足 入るが かた

常陸國

とまやちんびん 年貢 二斗の 不足 入るが かた

下野國

とまやちんびん 年貢 二斗の 不足 入るが かた

肥後國

君にも見せられた此こくしたれに見せろか
たれに見せろか

さまが来さるるが来さるるは東の海也の船がたつ
同國の小麦を挽洲なり

御寺の木の葉は急の女やならでふまがなる

あまの屋の廻れば七里うらが七浦七さびす

因幡國高州郡加治村也の洞なり

酒を思ひ出すたばこあすれ免角たはこがあすれ草

上野の妻即也の洞なりは

うの甲に藤まひもの植田はあまののあま

因幡の洞なりはあまのの洞なりはあまのの洞なり

あまのの洞なりはあまのの洞なりはあまのの洞なり

武女坊も那勝負女也の洞也

あまのの洞なりはあまのの洞なりはあまのの洞なり
あまのの洞なりはあまのの洞なりはあまのの洞なり

大寺治教をたしてなるひ大寺治教

あまのの洞なりはあまのの洞なりはあまのの洞なり

遠那の洞

天龍河原のふらあまのの洞なりはあまのの洞なり

然は漸にすむ鳥は木にとまふ人はあまのの洞なり

右に成りたりや演習るに御社の御前(のり)

田植

歌のあまのの洞なりはあまのの洞なりはあまのの洞なり

集

及同書拾遺なり殊々拾遺のふらあまのの洞なり

採

日のかれいも数の中(こも)いりあまのの洞なり

雷と玉雷交

草津の野で焼餅が及んだより小豆が知らなうで誰が知らう
こんな物話のよき思はず笑ひあすこゝあり
甲子年迄は五石の石を載せしむる雷まうた
瘡を患して痛むし玉雷の香を細判して與ふに一羽に
て平愈せしむるをひらきぬのまじ雷火すし
やけとをきかすもろくを火中にくすべその煙を
かざせば治すところをひらきぬあり四方より
て玉雷の香をきかす雷海の児を天井へつし置けり
これらの説もよく聞くものか
神樂を敷くは川原の大典の二重橋
りを見しこもあしが神宮の参典の節
流石の神樂舞は神樂舞をきかす

小神樂の歌
昔月と白雲
しのぶ

男の書
道神

許可されしものを出しをのぼりて
其地大久保に神樂の節
出し人形を牛車に乗せし
出の節の儀今九百面に
のより節の儀今九百面に
二年の節儀今九百面に
して節儀の如き
甲子年不知の道神
道神
男の書
道神
全あ



総口
の
総
の
流

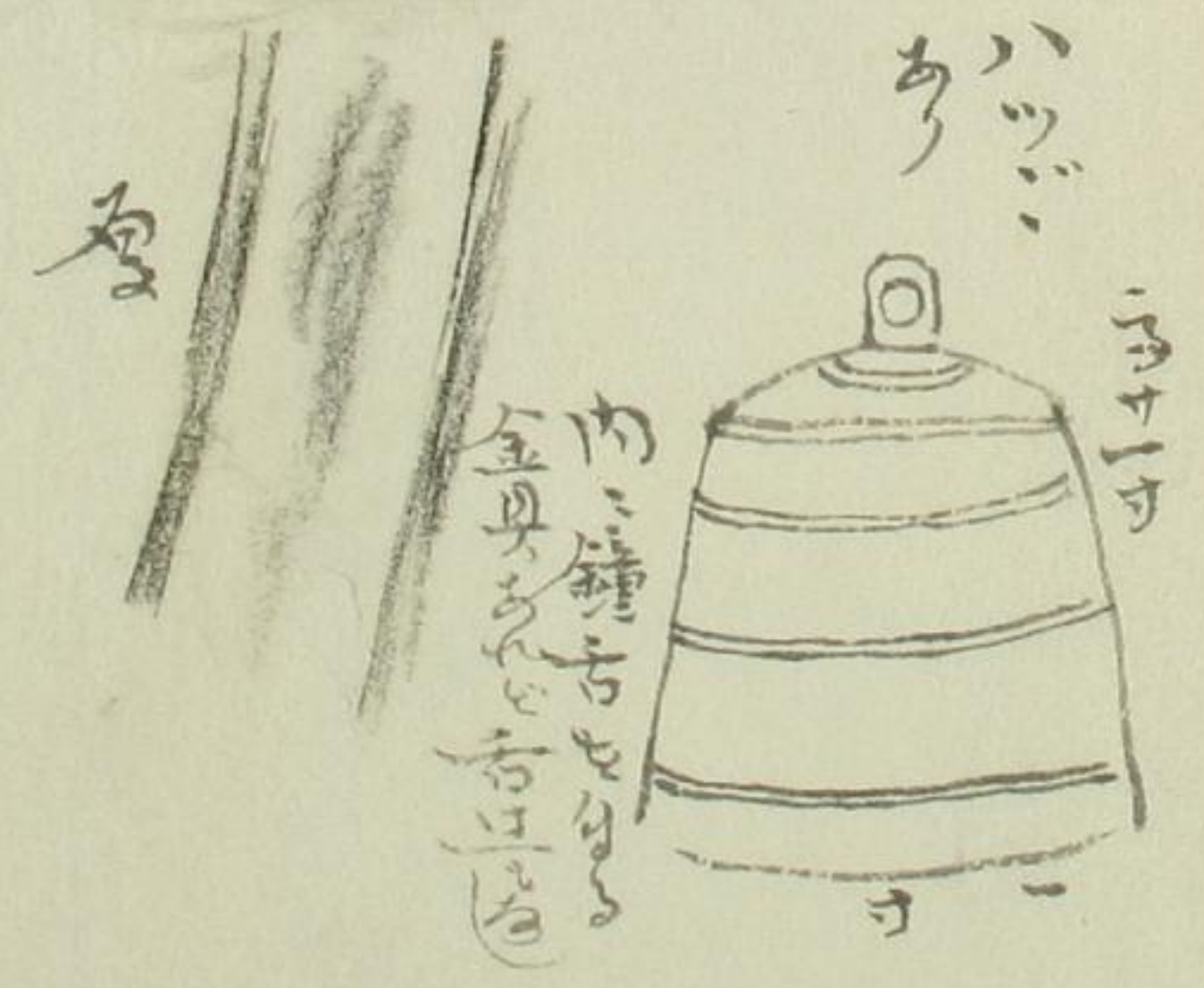
大指微笑の成極
花冠のまじり千里の
佛堂の前は城郭の如く
に定めたるものなり
七南服せしむるは
かざりたるは
し玉の
也
き
結

甲斐
の
馬
飾
の
具
か
い
り
具

甲斐國馬の飾り一對



ある
藤
の
字
を
用
ひ
て
あ
ら
わ
せ
た



三
回
村
の
成
大
正
九
年
十
月
廿
日
山
崎
屋
の
蔵
に
在
る

唐草湯

倭割梁に唐草を巻く歌とて

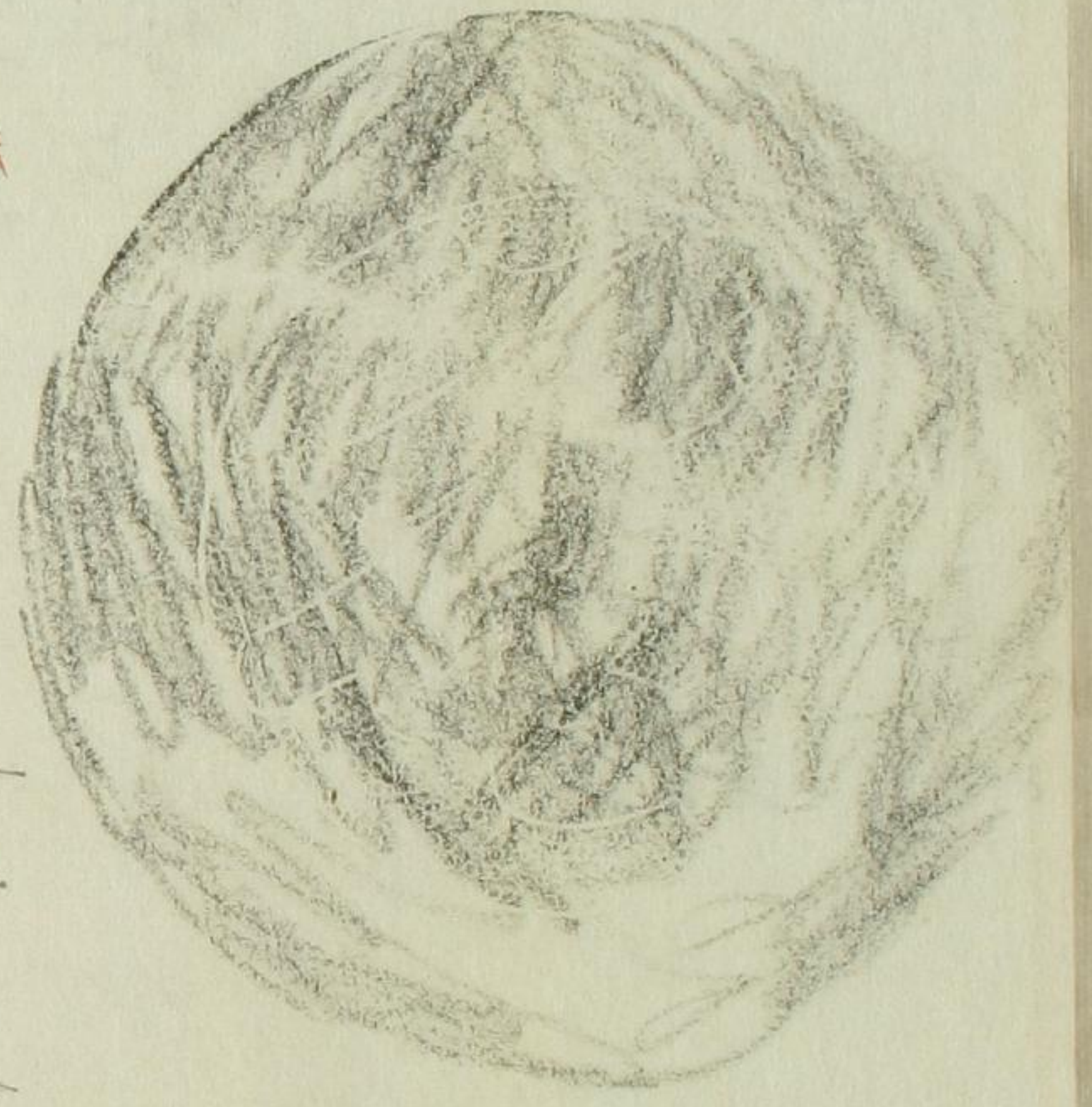
一五三四二二かよひぬ三三のめ本座かしら
 引はぬもぬいぬぬの足せしす三三や略
 引はぬもぬいぬぬの足せしす三三や略

一五とふアイウエカシ四二二通いカキリケコキ
 共三二とサシスセセリ三三の本なるタ子ツテト
チシハチン
ツシハチン

東引ハチシ
チシハチン
 格足き
チシハチン
 格同
チシハチン
 略同
チシハチン

近年東草の湯切りの草をわけては能を唐草
 せしが中将湯の家母草湯熱海草湯ふはラテイリ
 ちしは漢方の名を引して入湯者を引くこと

東草湯



たおとら回れ



こり枝えきを枝の歌あつる
 忽ちち田是サアア
 二二二回れちる何れとちちちちちち

也哉尊の
 種々の名に
 と其也の同名
 に就ての法事

ふらりしをが庭訓鈔に草木花草の湯いふに
 其方槐アア子桐桑朴の木のアアが等の草木
 蓬石葛午膝車前草ハコト道ノ葉蕃薇及
 馬鞭草等の八草をてつる湯にし湯するをてん
 也哉名マアろの名称を宛して有るもの記す有
 の元日深こめ特種と称のつじゆを所す
 あり一併也哉名隠然と名のつけられ可成り
 ありコト併然のりもかたもりも
 事しを物集也哉并はこれら衆生のふれたのみ
 なるべし併然のりもかたもりも
 十方諸佛其をあり然ひし中に也哉并告とのこま
 しく未未無世の衆生をあらざり討断す一日にたるとも

惡道入る然事勿れと仰せられ也されも冥途の事
 ありては尚事也哉尊のの事引導利生ありり
 然ふへきなりありて高慶王をありて中者衆人を也とあり
 十王をありて日をも衆人をすむ然ふ自業自得あり
 ぬかれりけれ必ぶ衆生をかまはせ苦患せりけ然ふ
 ぬやも衆王のまに世の苦のを下さる信
 ぬえ衆のの名をつけし如利をて入然ふも信
 望也哉山陰教記吾判於道此傍多建五石刻也哉尊像
 往來飛空間以普益覆於石像憶其因于後世智能之
 縁乎とあり智能の故事は元言釈書ありて及也
 能思教山横川般若谷建兩層一破宇有也哉尊其像
 漏濕見雨漉被體脫前ハ蔽益覆頂去晚年能死

便盛也 獄過也 藏之濟一矣
腹帶也 藏 京三重 寺疏清帶寺といふ其地の上
なる元は氣所通下五重下腹帯の可といふもじを爰
とす

帯解也 大和及所因會、今市村帯解寺あり春日
の祀なり 此也 是は及續帝の后深殿皇太后三三日月あ出る
なり 靈夢より 此也 なる信作あをえんる平鏡
後み多し清和天皇と申奉りたるに 此也 女
守仙なりとす
深也 藏 蓮多米のの言あり 淨土宗安養院の東なり
堂と云儀の也 藏 あり俗禪也 藏 といふ又前出し也 藏 とい
ふ禪形 一と云ふも 此也 厨子あり 衣といふ也 といふ

冬 禪の入り禪一と云ふなり 帯の也 藏 まで女根作りけり
此も 孝平時勅其婦人と云ふの 後 此也 幸ふ 禪 なる
と云ふ 禪 一と云ふ 此也 藏 なる 此也 女體
と云ふ 禪 の上に 此也 然ふと云ふ 此也 禪 なる 此也 也
官也 藏 なる 此也 女と云ふの時より 此也 禪 なる 可矣
禪 也 藏 本所中郷 此也 禪 なる 此也 禪 なる 此也 禪
考 禪 なる 此也 禪 なる 此也 禪 なる 此也 禪 なる
禪 也 藏 禪 なる 此也 禪 なる 此也 禪 なる 此也 禪
網引也 藏 和漢三才圖會、在何処 堂後山上 高申相傳
由比濱漁父羅網引二石 儀也 其背有窪 潮汐從修 禪
藏 三才 此也 有文字 供養 禪 師性仙 長老 禪 禪 禪
真賞 といふと記せり

油橋地藏 長津名所因會、安堂寺所二月、存石佛
あり新納者由々而く
味曾地藏 甲府本出河所公園、時宗の寺あり其門に
味曾石像、味曾とありつり新納す
塩地藏 味曾とありつり新納す
つりも塩清とありつり
谷地藏 尾張又所因會、山邊村あり新納地藏院
これとありつり新納す
より出現戸部村にあり又慶長年中今この地に出現す
云ふつり新納す
時に老翁來りつり新納す
新納者湯まを流して新納す

笑地藏 兵庫淡嶋記、後一條院宣ありて古橋木を以て
地藏をこきこみ大納寺に安置す供養の初度四修大納言
公任御仲前に
長橋はせも埋もれ橋柱又みちかてくを流す
所をいけれ地藏を築然として微笑の色ありこれより
流すの笑地藏とありつり新納す
沙股河の邊の地藏をこきこみ本朝俗談志に美濃國の
善股川の邊の地藏、西行が成子西住を新納す
橋の古材を以て此らつり新納す
朽猿さまをここの下の橋まら又さまかてくを流す
とあり山股善股川の川名をこきこみ
玉皇地藏 山城國比叡寺にあり張ぬるの石像あり

後也哉 和の天性ありては建武年中

素数也哉 日見の山は素数なるゆえに

素数也哉 其の山は素数なるゆえに

素数也哉 其の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

後也哉 和の天性ありては建武年中

素数也哉 日見の山は素数なるゆえに

素数也哉 其の山は素数なるゆえに

素数也哉 其の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

後也哉 大和國の山は素数なるゆえに

東海人地不令入觀之の東主の方字と

首切也哉 相州通念即切移地見村にあり

二の家の也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

下馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

又馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

不敵也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

はるかの也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

我れ馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

し也を向くと云ふ馬は早主と云ふ

馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

下馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

化馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

兵員也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

守敏也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

ありけいむらて身也 能登國羽後郡吉原の村にあり

同名也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

はあり何れも 能登國羽後郡吉原の村にあり

東海人地不令入觀之の東主の方字と

首切也哉 相州通念即切移地見村にあり

二の家の也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

下馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

又馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

不敵也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

はるかの也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

我れ馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

し也を向くと云ふ馬は早主と云ふ

馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

下馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

化馬也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

兵員也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

守敏也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

ありけいむらて身也 能登國羽後郡吉原の村にあり

同名也哉 能登國羽後郡吉原の村にあり

はあり何れも 能登國羽後郡吉原の村にあり

まふいつの頃より里人があつてと云ふ所ありしに
日易なる地也軒下を穿てても其跡浪せえずして止み
其なる古代の地也毎敷うほせ一方なるぬりありと云
らるる

餅飼也哉 都久沙園會に云ふい野望の地なる全馬
寺のありあり放生川へ餅を与へ給ふ本なるあり
のま也哉 頼林重寶記 牛也繁土明神の境ありま
也哉とあり法師いほまらるるを記すも其地也哉を
信仰すれ七日の間にまらるるの禮を給すと今其地
をゆれぬしにかたし
鶴也哉このるは前記せし八尾の地也哉と同し
八尾の里より毎年七月廿甲物を煮て食ふといふ所の

例なり 亦ち八尾の地也哉祭と記し習ふと世人のまら
らるるといふ地也哉ありと云ふあり

潮灌也哉 長沙港草に 昔は清水寺の門前外
せ堂のありたり石像あり堂の左右畑也行く街なる
敷し其農も不浄を為しあり 昔は体も多し例の
是一夕の夢みらるる容貌端に法也ありと云ふ
乃ちせ堂の心藏なり農も昔は不浄を置
て地足す也其真氣も堪へず故物も砂也を清浄な
らめと盟日香花を供し潮水を汲み来りて象は
清くを日々不忽見用の号亦来りて清く名像逐に
乾くを有 因て潮灌也哉と云ふ
鼻缺也哉 本所本誓寺あり今河川左所の本誓寺

のこまらん 白石先生紳書二言條 二年以成七月十日
より本所の本誓寺の墓所ある自專 終つたる也 戒に
男女群衆して冬詣彩し九月の秋にいつともなる事 其
ナリ本誓寺一零錢を納め 二千四百五十支計
りに及ぶ 連文又は母子の等此のこまらん
弱を強たりかの石佛の身は萬治元年以成と云ふ字
すあり見えんかかなるをなすも ぬれん人なりしとあり
焼山也 戒諸國軍人談に 倭國南部領ハテス迄
大畑と云ふ一處に慈覺火吹化る香の二子體の石也 戒
焼山と云ふ一處に慈覺火吹化る香の二子體の石也 戒
り中尊は長け五尺あり也 此のみな小佛なるより人これを見
たして僅に後りけり 此の圓空と云ふ僧ありて 他
神して今午体は満たりと云ふ

其國也 戒其のこまらん 戒を云 たるが猶その縁に 此
るのこまらん 戒を云 たるが猶その縁に 此
十子體の也 戒のこまらん 戒を云 たるが猶その縁に 此
上後重也 地蔵十萬體 春林以為此 造一萬體 每體
三文也 予曰 春林寡欲 有難學之行 上二事 亦為
善也 一也
也 藏芥の誕日 清俗紀 廟は七月晦日 此の地蔵の誕日
といひ也 戒の廟は冬詣し 暮より家々門前は卓
を置き 香炉は跡香を焚き 家内の者一人は 瑞燭二本
宛の精進 一人は 燈を二十挺を 竹杭に差し 地上に
列ね 燃す 一人は 燈を二十挺を 竹杭に差し 地上に
地蔵祭 四騎 旅漫録 七月廿二日 二十四日 いたり

京の所々也哉祭あり一所烈家壬午寄の家には幕を
張り也哉祭を女をしらべの席をわたりて前より明
北灯をとり家前より子すすをとりて佛像の前に通じ
て酒もりあそびり酒を酌みあけその外番もを糸の種々の品を
とり家毎に飾りそくあり年中の所々の言ひ合せも昨日に
すといふそのありさまはうらの天を祭りの假言の如し
大見大也いっそうともちと同日ともあり
也哉祭の餅汁 八尾也哉祭の地酒 山城上野の東北
御善士薩也といふ村あり七月廿四日は毎年加例と
餅汁をとりて祝歡友達を招き飲食するをいふは
也哉祭に供すもの塩は善向なるを番椒もあり
又歌入ほろろとありてありてありてありてありてあり

とありてありてありてありてありてありてありてあり

とありてありてありてありてありてありてありてあり
ある北条の道なるに破岸中不也哉ありてありてあり
あるに也哉祭の回廊を歩きたるに不也哉ありてありてあり
のある堂宇の中にもあるに也哉祭の張りつけ
あるにあり

長考といふも元祿のちかき身代に能く永代成て
五百身よりして是れ分限とて千費目のうりて長考と
いふなりと西遊はしをなせり

大宮に北條のきりこもを唐の手にてきりこもを
だぶたう酒あけがぬがみりこもを下りにかすて
ぼろのあめひのあめひのこもいりてあめもてあめ

西鶴の某書に
とあり

又山崎の某書
の歌合品

崇拝の血止

宗門に引つこる者も子もしとあり金葉類有平
カルララ糖ボトカスラウ等何れも船来の菓なる
をもちし味淋葡萄葡萄其也名ははらぬ飲ゆる
しこをもち

河内幸屋對話血止に崇拝を患み碎らてけり血を
止めぬをいふとあり是法あり

此震の神

日本書紀 推古天皇七年夏四月乙未朔辛酉地震
舎屋悉破別命四方神祭地震神と地震中
の名如て史に見ゆ本名をいふて夢の伴法は
此震幸多きゆなりとあり
然がゆけが地震がすゆえ震の時要るをいふゆ
如くは信すれど大然がを書くは是くすれに

然と地震と
地震との説より
木魚出来し

説あり其説の

歎す説の論は是は火を教の非ありこの教の
身と痛めかして解甲をいふ其の世に地震ふとれば
其形も他とつねにちたるとは痛めかすゆゆ
木魚なることと因なることと然り此の
に善響をまする者物と魚をいふ魚は腹
すみ中にあると信せられ佛の物ゆけをいふ
ゆと魚をつけしことをいふ

除夜の果樹を打ちておぼろなるかたがちて此の
かたろふと申すことと果木のありて
こは今の世にありて除夜の意を果して屋上より
て我をいふと申すことと果年の見ゆことと
こそ敬木集註に見ゆ

除夜の因見

いよいよのうらなひなるをいひていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 いたるにやうにすゝりていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 木の上をいふていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 のうらなひすゝりていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 然るにやうにすゝりていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 大いにすゝりていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ

いよいよのうらなひなるをいひていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 いたるにやうにすゝりていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 木の上をいふていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 のうらなひすゝりていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 然るにやうにすゝりていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ
 大いにすゝりていふすゝりていふはつゝの年がうらなひ

共古日記四十一

目九十八



Red rectangular stamp with Chinese characters and a central emblem.



Large diagonal calligraphic inscription in black ink, likely the recipient's name and address.

Calligraphic text in the upper right corner, possibly a date or sender's name.

Large diagonal calligraphic inscription in black ink, likely the sender's name and address.

